

ことばとメディア

個人研究とプロジェクト型協働学習 | 学部生から大学院生まで多様なメンバーで構成される研究会だからこそ、常に新しい「気づき」が生まれる！

■ わらがいくみ
藁谷郁美

総合政策学部 教授

藁谷研究会は協働学習と個人研究の2本の柱で構成されています。

協働学習で進める対象はメディア比較研究。研究会所属の条件は、母語以外の言語で資料を調査・収集できること。メディアに浮上するニュースコンテンツは、その発信言語によってメッセージ内容も異なります。言語の違いは表現手段の相違だけでなく、そこに提示される世界観の違いにつながります。授業のなかでワーキンググループごとにプレゼンテーションを行い、その考察内容をめぐって熱いディスカッションが交わされます。SFCで履修できる外国語は11言語。言語コミュニケーション科目の履修単位は上限を設けていないので、やる気があれば相当のレベルまで到達できます。研究会の仲間がそれぞれ異なる言語をスキルとして使い、獲得した知見を皆で共有すること、自分ひとりでは見えてこなかった視点を「気づき」として認識することに繋がります。

す。「これ、おもしろい！」「寝食を忘れるくらい夢中になれる！」自分独自の視点・問題意識を研究テーマに設定することが、本研究会のルールです。演劇、スポーツ、広告、文学、外国語学習、アニメーションに至るまで、学生たちの研究テーマは実に多岐にわたります。多様な研究テーマは大きく3つの分野に分類され、RW (Research Working Group) を構成しています。個人研究と並行してRWごとにディスカッションを重ね、そこから共同研究が生まれることもあります。年に1度、外部に向けて開催されるフォーラム (SFC Open Research Forum) に出席し、ブースおよびポスター発表の形で研究内容を公開します。毎年、全体の研究を論文誌としてまとめることで、目標達成に向けた研究計画を各自が具体化し、遂行していきます。学部1年生から大学院生まで多様なメンバーが共有する協働学習の場、この半学半教の場を支えていくことが私の役目です。



好きなことを研究に—理論と実践、2つの視点でアプローチ—

ひらまつ ゆう
平松結有君 総合政策学部3年

私の研究テーマは、宝塚歌劇団に対する固定概念についてです。独自の世界観を展開してオリジナルミュージカルを作り上げる宝塚歌劇の舞台を研究対象としています。

授業の外では実際にミュージカル作品の制作に没頭し、スタッフ、舞台演出、脚本制作など、さまざまな役割を現場で実践しています。

当研究会では、全員が自分の好きなことを研究テーマに掲げています。私の場合、入学時から打ち込んでいる舞台活動を研究対象とすることで、理論と実践の双方によって得られる、経験の蓄積や知見という2つの視点からのアプローチが可能になります。このことが、私のオリジナリティーを発揮できる研究につながるのだと感じています。

当事者のまなざしから創るケア

私たちのプロジェクトでは、患者や市民、健康課題を持つ当事者の視点から、ケアを共に創るフィールドワークを目玉において研究を進めています。その要は〈尊重と信頼〉。

こまつひろこ
小松浩子

看護医療学部 教授

超高齢化社会の到来、それは、〈ケアの時代〉の到来を意味します。急性期疾患に対する〈治す医療〉のみならず、慢性疾患や生活習慣病など治すことが難しい病に対し、〈暮らしや生き方を支えるためのケア〉の開発が急務となっています。

食事療法や薬物療法、運動療法の継続は、頭では分かっていますが、それを習慣化するには、並々ならぬ努力が必要です。それは、一つ一つの健康行動には、個々人が生きてきた歴史や環境、人間関係が関与しており、個別の意味や価値を内在しているからといえます。

がん医療・ケアの最前線は、外来通院治療に大きくシフトしてきました。がんに対する分子標的治療薬を継続する高齢者の中には、「命をつなぐ薬を飲み忘れたりほしくない」と医師に断言する一方で、看護師に「副作用が強いので半量しか飲まない」とポロリとつぶやいて帰る方もいます。いったい、この相反する気持ちは何を意味しているのでしょうか？ その答えは、この方の言葉に耳を傾け、当事者としての思

いや気持ちに近づくこと以外の方法からは導き出せないでしょう。

このようなケアを実現するためには、「当事者学」が要となります。これまで研究の「客体」として扱われていた対象が、「主体」として中心的な役割をもつ学問です。当事者学では、当事者（患者等）が自らの手で自分自身やそれを取り巻く社会、ケアの在り様について探索を進めます。

私たちのプロジェクトでは、患者や市民、健康課題を持つ当事者の視点から、ケアを共に創るフィールドワークを目玉において研究を進めています。当事者の視点に立つということは、ケア提供者側から〈足りない・困っているであろうこと〉を見つけて出すのではなく、〈その人の力や意思を信じ、尊重すること〉を通して、共に解決の方向性を見出すことであるといえます。この研究者としての姿勢は、学生同士、学生と教員間にも貫かれるものです。まだ少数人数のプロジェクトですが、〈ケアの時代〉に向けて、その輪は拡がっています。

看護を研究する楽しさを学ぶ

みなと

湊かおり君 看護医療学部4年

私たち小松プロジェクトは、主に慢性期・終末期にある患者や家族の看護に関する研究をしています。ゼミを通して、小松先生をはじめさまざまな先生方からご指導いただき、看護研究の面白さを日々感じています。私はがん患者のピアサポート（当事者同士の相互支援）に関心があり、先日「乳がん女性のためのサポートプログラム」でフィールドワークを行いました。同じ病気を持つ患者同士だからこそ共感し合える悩みや真の思いを直接聞くことができ、ピアサポートの力を実感しました。今後は自分の関心事をより明確にし、フィールドワークで得たことを研究に生かしていきたいと思えます。

